

親鸞聖人（中）

著者	一郷 正道
雑誌名	真実心
巻	38
ページ	173-184
発行年	2017-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000838/

親鸞聖人（中）

一 郷 正 道

前号で、聖人が抱えておられた課題として私なりに整理して次の三項を挙げておいた。

- (1) 性の問題
- (2) 断煩惱得涅槃・比叡山での修行目標への疑問
- (3) 死・浄土往生の問題

これら三課題は、二十年に及ぶ比叡山での修行では解決できず法然上人との解近によって氷解したことを述べておいた。

今号は(3)の課題について現時点での私の見解を記すことにする。これは、「真宗の救いは何か」と換言できよう。

聖徳太子の夢告で「命終して速やかに清浄土に入らん」、救世観音の夢告では「臨終に引導して極楽に生ぜしめん」と授記された。これらの夢告ではいずれも臨終、命終して極楽浄土への往生が明記され、極楽浄土の往生こそが救いであることが示唆されている。一方比叡山での修行目標は、断煩惱得涅槃で、救われかたが全く相反する。そのはざまにあった聖人の苦悩の深刻さは容易に想像できる。そして聖人が法然上人に遇って教示された救済のあり方は次の如きものであった。

一心にもつばら弥陀の名号を念じて、行往坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるは、これを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるがゆえなり。（善導六一三―六八一『観経疏 散善義』 聖典全書1、七六七）

つまり、称名念仏によって目標である極楽浄土への往生が達せられるというのである。所引の「念じて」の「念」は、善導によって「称える」と同義語になったとされる。さらに法然上人が、「念と声とはこれ一なり」（念声是一）と受けとめ、聖人もこれを継承された。ここに念仏即称名の思想が確定したと藤田博士は述べておられる。¹⁾

親鸞聖人(中)

ここに、称名念仏こそが、浄土往生のための正しく定まった実践行である、と宣言されており、しかもその理由は仏の願に順ずるからである、と善導が理解されていたことが判明する。この善導の理解に法然上人が目を開かれ、聖人も納得されたことを意味する。この『観経疏』の一文こそ、『歎異抄第二条』にみられる本願―釈尊―善導―法然―親鸞と相承されてきた仏教史観の源といえよう。

聖人の比叡山の修行時代を通じて鮮明になった究極の課題は、真宗の救いとは何か、ということであろう、そしてそれは称名念仏による浄土往生であると結論づけられたといえよう。以下に浄土往生に関連して現時点での筆者の理解を整理しておきたい。

真宗における救いの目標が浄土往生にあることは『歎異抄第二条』の文言からも傍証されよう。あの時代に身命をかえりみず関東から京都へわざわざおもむき聖人と面座して問い、確認せねばならなかったことは、「往生極楽の道」であった。そしてその回答は、「ただ念仏して、弥陀にたすけまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」だった。すなわち、念仏して極楽浄土へ往生することが真宗門徒の目標なのである。

そもそも、私たちは何故浄土を求めざるを得ないのであろうか。筆者は、肉体の死に対

する不安と恐怖からの解放こそ浄土を希求する原点だと考える。

仏教は苦からの解放を説く。その苦とは四苦八苦を内容とする。人間存在そのものが苦であるとする総括的な「五蘊盛苦」のもと、具体的に生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦の七苦が挙げられる。そして、それらの原因は、無知（無明）、欲望（渴愛）、言葉（戲論）に在りとしたのが、釈尊、龍樹の見解であった。

それら諸苦のうち人間苦の最たるものは、死苦―死に対する不安と恐怖―であると愚考する。なんとすれば、死の到来を誰も予知できない現実、それに対する不安と恐怖、私の死は誰にも代わってもらえず私が引受けるしかない。死に伴なって生ずる淋しさ、悲しみ、辛さ等の感情は深刻そのものである、等の理由からである。この死苦からの解放を教えるのが浄土教であると思う。肉体の死を前提にしない浄土論は、哲学者たちの観念の空論でしかないように思えてならない。人間存在の根底からふりかかってくる死苦に応えてきたのが浄土教の歴史ではなかったであろうか。浄土、浄土教を必要とする素朴な心情を語る一文を紹介しよう。

不治の病床に身をよこたえた幼な子が、母に尋ねた。

親鸞聖人(中)

「お母さん、死んだらどうなるの」と。ただ口先ばかりの慰めの言葉を繰り返すことの空しさに耐えかねた母は、祈るようにして答えた。

「坊や、仏さまの国へ往くんですよ。お母さんも、きつと後から往きますから、待っていてね」と。幼な子は、つぶやくように言った。

「うん、待っているよ、きつと来てね」と。数日の後、幼な子は死んだ。わが子に先立たれた悲しみの中で、残された母は自らに語る。

「私は、坊やとの約束をはたさねばならない。でないと、坊やをだましたことになるのだから……」^②と。

浄土教の興起、展開にはその発生地、伝播した地域における時代背景、社会情勢を無視してはならないであろう。浄土の教えは、時間・空間を問わず、いかなる人にも迫りくる死への対応が出発点になっているからである。

浄土教発生の地であるAD一〜二世紀頃のインド・北西地域の場合は次のように語られている。中央アジアのイリ川流域に住んでいたサカ族が月氏族に追われてインドへ侵入。カスピ海のあたりに興ったパルティア王国が南下してきてサカ族を滅ぼし、西北インドを

支配する。このような動乱がクシャーナ王朝のカニシカ王が大帝国を建設するまで続いたとい^③う。

中国では、五世紀以降曇鸞、道綽を経て善導で大成した北地浄土教は隋・唐の時代を中心に七世紀末まで栄えたとされる。アミダ仏の西方浄土を説く緒経典がインドから伝来するにつれ、浄土で現在説法するアミダ仏信仰が広まった。その展開の背景には仏滅思想があったとされる。その末法到来を実感させるかのように破仏事件がおこり、浄土教が時期相応の教であることが知られることになった。^④

それでは、法然、親鸞の在世した鎌倉時代はどうであったか。一一八一年には養和の大飢饉がおこり、『方丈記』によれば四万二千余の屍が累累と京都市中に積み重ねられていたという。貴族社会から武家社会への大変革期でもあり社会的混乱は想像を絶するものがあったにちがいない。又、末法思想の広がりも喧伝されていた。

また、現在の日本はどうか。天災（地震、津波、火山、台風）、高齢化に伴う社会不安、交通事故、原発事故、格差の拡大、ヘイトスピーチ、テロの頻発、孤独感の深化、保護主義的傾向の広がり、等々現世での不安感は募り、幸福感はうすく将来への希望は見出し難い。

親鸞聖人（中）

さらに浄土往生を希求せざるを得ない宗教的心情もある。それは、罪悪深重、煩惱熾盛の私の発見である。

いずれの行もおよびがたき身なれば一定すみかぞかし（歎異抄第二条）

こんな私であってみれば、現世での浄土往生、得涅槃などどうして可能であろうか。様々な原因・条件から死がいつやってきてもおかしくない、せめて死ぬときは安心して死を迎えたい、死後の世界は平和であってほしい、といった誰もが抱く素朴な人間感情は、この世で悟れる人はいざ知らず、大事にされるべきだと思う。

自らはガンで逝去された岡部健医師が次のような興味ある調査報告をしておられる。「お迎え現象」という言葉を耳にするが、それは、死を準備する過程において自然に発する現象だと岡部先生は言われる。そして、その現象は、40%ほどの人は体験しているにちがいない。その体験は、病院の入院患者ではわずか5%、在宅の方では87%が体験しているとのことである。そして、お迎えがあつて死後自分の行き先が見えてきた人は、基本的に安楽な平和な状況で死を迎えているとのことである。⁶⁾

それでは極楽浄土は存在するのであるうか。いかなる科学的知見によってもその存在は証明されるものではない。それは、主観的事実の世界であるから、浄土は、必要とするものには有るが必要としないものには無い。

自分は地獄行きの身、その身があるからこそお浄土があつてくださるのだという真摯なご信者の言葉にすべてが語り尽くされていると思う。

眼に見えなければそれは存在しない、と容易に言っていていいものであるうか。それは現代人の悪弊でなからうか。筆者は金子みすゞさんの詩に、浄土の有無についての回答が語られていると思う。

青いお空の底ふかく 海の小石のそのように 夜がくるまで沈んでいる 昼のお星は
眼に見えぬ

見えぬけれどもあるんだよ 見えぬものでもあるんだよ⁽⁷⁾

それでは極楽浄土はどんな世界なのか。經典の描写に依るしかない。それは枚挙にいとまないが筆者に印象的な事柄、描写のみ挙げることにする。

親鸞聖人（中）

『仏説無量寿経』

- ① 国（極楽）は泥洹（涅槃）のごとし。（聖典一一二）
- ② 法蔵菩薩、今すでに成仏して、現に西方にまします。此を去ること十萬億の利なり。その仏の世界を名づけて安樂と曰う。（聖典二八）
- ③ 清浄に莊嚴して、十方一切の世界に超踰せり。（聖典二九）
- ④ かの仏国土は清浄安穩にして微妙快樂なり。無為泥洹の道に次し。（聖典三九）
- ⑤ そのもろもろの声聞・菩薩・天・人……自然虚無の身、無極の体を受けたり。（聖典三九）
- ⑥ 天下和順し日月清明にして、風雨時をもつて災厲起こらず。国豊かに民安し。兵戈用いることなし。（聖典七八）

『仏説阿弥陀経』

- ① これより西方に、十萬億の仏土を過ぎて、世界あり、名づけて極楽と曰う。その土に仏まします、阿弥陀と号す。いま現にましまして法を説きたまう。……その国の衆生、もろもろの苦あることなし。但もろもろの樂を受く、かるがゆえに極樂と名づ

く。(聖典二二六)

②かの仏の光明、無量にして、十方の国を照らすに障碍するところなし。このゆえに号して阿弥陀とす。(聖典二二八)

③極楽国土の衆生と生まるる者は、みなこれ阿鞞跋致なり。その中に、多く一生補処あり、その数はなはだ多し。……まさに願を發しかの国に生まれんと願はずべし。所以は何。かくのごときの諸上善人と俱に一処に会することを得ればなり。(聖典二二九)

④もし善男子。善女人ありて、阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持すること、もしは一日……もしは七日、一心にして乱れざれば、その人、命終の時に臨みて、阿弥陀仏、もろもろの聖衆と、現じてその前にまします。この人、終わらん時、心顛倒せずして、すなわち阿弥陀仏の極楽に往生することを得ん。……もし衆生ありてこの説を聞かん者は、まさに願を發しかの国土に生ずべし。(聖典二二九～二三〇)

インド起源の両浄土經典をみる限り、極楽浄土が人工的に裝飾、莊嚴された様相を呈している印象をもつことは否めない。これも当時のインド社会の現実の反映として、理想的環境、平和な世界としてとして描写されていると推測できる。

親鸞聖人（中）

また、筆者にとって興味深いのは、浄土が「俱会一處」の世界として説明されている点である。死後かならず迎えていただく浄土の世界が、善き人との再会の場として提示されていることである。この世と浄土が隔絶したものではなく人間的に情的継続性を感じることができる。金子大栄先生をして「あの亡き息子達に会えない浄土であるならば、そのような浄土は私には要りません⁽⁸⁾」と言わしめたように、浄土は正に俱会一處の世界であるがゆえに必要なかつ尊いのである。

平和な世界、俱会一處の世界として浄土が描写されるのも、偏に、私をして死に対する不安と恐怖から少しでも解放させようとする慈悲の心の表われと思えてならない。

（つづく）

註

- (1) 藤田宏達『浄土三部経の研究』四五四頁、岩波書店 二〇〇七年
- (2) 廣瀬果『増補滴々抄』二二頁、文栄堂書店 二〇一二年
- (3) 梶山雄一著作集第六卷浄土の思想三二九頁、春秋社 二〇一三年
- (4) 佛教史学会『佛教史概説中国編』四七〜五四頁、平楽寺書店 一九六〇年
- (5) 『方丈記 徒然草』二十九頁、三十二頁（日本古典文學大系30 岩波書店 一九五七年）

- (6) 奥野修司『看取り人生の遺言』一七五頁～一七七頁、二〇三頁、文藝春秋社 二〇一三年
- (7) 金子みすゞ「星とたんぽぽ」より
- (8) 幡谷明『大悲の妙用』一八一頁、自照社 二〇一六年
- 聖典Ⅱ『眞宗聖典』東本願寺出版部 一九七八年
- 聖典全書Ⅱ『浄土眞宗聖典全書』本願寺出版社 二〇一三年